

高田藩 (榊原家) と和親会

旧高田藩和親会 (榊原慈善団後継) 財団法人認可
百周年記念に思う

上幕 松川 太賀雄 (稲田出身)

旧高田藩和親会 (略称: 和親会) は、明治四十二年 (一九〇九) に財団法人の認可を得て組織された榊原慈善団の後継として百周年を迎えました。

和親会は当初、会員は旧藩士に限られていたことから「旧高田藩士族和親会」と呼称して、会員相互の親睦と旧藩士の墓所が多い金谷山墓地の維持管理を目的としていました。現在は、金谷山墓地を一般に開放するようになって「土族」を割愛し、「旧高田藩和親会」と改めています。したがって、会員は金谷山墓地に墓を持ち、榊神社 (祭神) を崇敬する人。さらに高田藩・榊原家が地域の歴史や文化に果たした貢献を尊重して、その威風を現在と将来に伝承しようとする意思を持つ人々によって組織されています。

九月十四日、和親会は榊神社祭礼の

「勸学」は藩祖・康政公以来の藩風とはいえ、政教公の英断はまさに国家の将来に思いを馳せられた偉業であり、明治四十二年一月、財団法人に認可されて百周年にあたる今年、記念碑を建立して顕彰の意を表するものである。

平成二十一年九月吉日



松川 太賀雄さん

日に百周年を記念して、次の二つの事業を行いました。

一、「勸学の碑」の建立・除幕式

育英事業などの基金を下賜された榊原家十四代藩主・政教公の偉業を顕彰する「勸学の碑」(碑文・長谷川新氏、レリーフ制作・濱口剛氏)を榊神社の北鳥居脇に建立し、榊原家十七代当主の榊原政信氏 (Jネット顧問) ご夫妻により除幕式を執り行ないました。

「勸学の碑」の碑文は、次の通りです。版籍奉還、廃藩置県など明治維新に伴う社会的大変動期にあつて、榊原家十四代藩主・政教公は、当時の高城村・高田町村町費二年分に匹敵する城地売却費を育英事業などの基金として下賜され、旧藩士相集いて榊原慈善事業団を組織、天下有為の人材輩出の基盤を築かれた。

二、記念フォーラムの開催と和親会会報の特別号を発刊

除幕式の前日に「勸学・育英に尽くした高田藩 (榊原家)」を内容として百周年記念フォーラム (講演) を開催しました。そして、榊原慈善団が組織される

までの時代背景を「江戸幕末から明治後期までの激動期に勸学・育英に尽くした高田藩 (榊原家)」(主筆・長谷川新氏)と題して和親会会報・特別号を発刊しました。

和親会会報特別号「江戸幕末から明治後期までの激動期に勸学・育英に尽くした高田藩 (榊原家)」は、当時の高田藩の様子を、よみもの「仕立てにして記されています。内容については、目次を紹介しますので推察して下さい。まえがきに続いて、

一、「昨日の見方が今日の敵」激動する

国情

二、「勤皇か佐幕か」に二分する藩論
三、古屋作左衛門率いる歩兵隊の侵入

四、藩是に抗し脱藩、東征軍に挑んだ「神木隊」
五、「相身互い」の会津藩士扱
六、途絶えなかつた「勸学」の藩風
七、人材を育成した榊原慈善団
八、求心力の象徴・榊原神社と旧高田藩和親会となっております。

問題解決を本質的に決断する「勇氣」

幕末から明治維新、そして明治後期までの激動する高田藩は、時流が刻々と変化する中、譜代大名の雄として幕府側につくべきか、朝廷方に恭順を示すべきか、徳川恩顧と現実とのほざまで藩論は二分しました。三河以来の幕臣としての一分を通したいのは当然、たとえ「腰抜け侍」とか「二股青葉」呼ばわりされ、後世なんとなしに肩身の狭い思いをする向きもありますが、そのような感情と一線を画し、主家と家臣や領民を守るためという新たな視点で、朝廷に恭順する道を選んで現実的な折衝や対応をしたので、このことから、物事の本質的な問題解決を決断する「勇氣」を学ぶべきだと

思います。

また、高田藩は本来十五万石ながら実収高が半分にも及ばない藩財政でした。明治二年には会津藩降伏人の預かりを余儀なくされた時、護送されてくる沿道筋に高田藩は「罪人であつても、土道に従つて戦つた人々である。いやしくも二階から見下ろすことがあつてはならない」という趣旨のお触れ書きを出したといわれ、それだけでなく困窮している高田藩士は、戊辰戦争で生活が更に逼迫しているにも関わらず千七百四十四人も預かり、精一杯の扱いをしたと思われる実直な事例は、今に生きる私たちを凛とさせるのです。

さらに、碑文に記されていますが、榊原家十四代藩主・政敬公は、当時の高城村・高田町の村町費二年分に匹敵する巨額な城地売却費を、困窮する旧藩士などの救済と人材輩出の基盤を築く育英事業などの基金として下賜され、榊原慈善事業団を組織されました。このことは現在の世情と将来的視点において「景気・福祉」もさることながら、「勸学」は藩祖・康政公以来の藩風とはいへ、「教育」が最重要課題であるとして人材育成に尽くされた政敬公の英断と旧家臣の英知に心から敬意を表するものです。

「ブランド」と「のれん」

そもそも高田藩榊原家は康政公を藩祖として「徳川四天王」という強力なブランドであり、永くその名を残す「のれん」です。

現代のマネジメント流に言えば、ブランドは自己の個人的能力を高め、広く名前を知らしめて仕事の成果を得ることで「のれん」は家族的な結束のもとにチーム内の充実を図り、仕事や組織の永續性を第一の目的として行動することです。

榊原家第十四代政敬公は、熱意があり才能に恵まれながら貧窮のため勸学の機会を持たない旧藩士子弟の育英と生活困窮者の救済のために、広大な城跡を売却した巨額な資金を下賜されて「榊原慈善団」を創設されました。財団法人に認可されて百周年を迎えることは、先人の労苦に感謝しつつ「旧高田藩親会」の「ブランド」と「のれん」の意義を今また新たに問いかけられた思いで身が引締まるのです。

榊神社は、市民歌ともいふべき「高田の四季」が「榊神社の社たそがれて」と歌いあげるように鬱蒼たる樹木に囲まれて、創建以来百三十余年になります。高田市の中心部に位置することもあって、市民にとって敬虔な祈りと心安らぐ憩いの場所として親しまれて来ました。

新しく建立された「勸学の碑」は、市民に多くのことを語ってくれるでしょう。

